

公民館サークル活動における参加者像と運営実態

野 島 正 也*

An Analysis of Group Activities in Citizen's Centers

Masaya Nojima

1 調査の背景と調査地点

公民館が社会教育事業のための施設として位置づけられたのは、社会教育法（1949年）によってであった。社会教育法では、公民館における事業についての規定があり、定期講座を開くことや講演・講習・実習・展示等の機会をもつことが明示されているが、公民館サークル（グループという呼称もあるがここではサークルという用語で統一する）の規定はみられない。社会教育法の中でサークル活動にもっとも関わりの深い表現は「施設を住民の集会その他の公共的利用に供すること」ということになる。

公民館の利用で、サークル活動が主要な位置を占めるようになったのは、各種講座等で学習した人々が自主的にサークルをつくって公民館で学習を継続したことによる。また、公民館職員も講座終了後のサークルづくりを、講座の成果の一つとして、講座修了者の自主的な動きを後押しした。また、公民館の利用形態が多様化する中で、講座の受講を経ないで住民有志が公民館サークルを立ち上げるケースも多く見られるようになった。

今日、多くの公民館では、住民の自発的なサークル活動が展開されるようになったが、その一方では、会場確保の難しさ、会費の高さ、会員・役員の高齢化、講師による私塾化など、サークル活動を巡る問題も顕在化してきている。

サークル活動に関わる問題については、職員やサークル役員からの個別のヒアリングによって、ある程度、その輪郭については把握できている。しかし、サークル活動にいそしむ一般の会員の意識については統計的に把握されることは少なかった。今回の調査研究は、限られた規模ではあるが、サークル活動の会員像と運営実態について統計的な把握を試みるものである。

調査地点は、千葉県浦安市である。千葉県の北西部、東京湾の奥部に位置し、江戸川を挟んで東京都と接している。公民館活動は概して活発である。筆者は2000年12月に、当市における市

* のじま まさや 文教大学人間科学部

民の生涯学習意識についての調査（以下、全市意識調査）¹に加わっており、そのときのデータと比較参照が可能という利点も考慮して、当市での調査実施を決めた。当市には公民館が6館ある。そのうち地域的なバランスを考慮して3館を選んだ。次いで、各館をベースに活動するサークルの会員を、できるだけ多くのサークルにわたるように努めつつ、任意に各100名余を選び、これを本調査の調査対象者とした。その総数は307である。

なお、浦安市の公民館サークルは、市の規定で、あらかじめ「公民館利用登録」をしておくことになっている。登録の条件は3人以上で、過半数が市内在住在勤であることとなっている。登録したサークルは市内の公民館ならどこでも利用可能である。

2 サークル活動者像

調査対象者の抽出は、厳密な統計的手法をとらなかったため、厳密な意味ではサークル活動を行っている市民（以下、サークル活動者）の意識や行動の実態を反映していないが、概略については把握できたものと考えられる。

サークル活動をする人々の基本的属性をみると、性別では、男性が約1割、女性が約9割である。年代的には50代が多く、次いで60代が多い。両年代を併せると、活動者全体の半数を超える。活動者の就労状況については、専業主婦と退職等による無職の人を合わせると、全体の約7割を占める。あとの約3割が勤めの仕事をもっている人である（パート就労を含む）。また、活動者のうち9歳未満の子どもがいる人は、全体の約2割であった。

浦安市に居住する年数をみると、最頻値は「20年以上30年未満」で全体の約3分の1に当たる。次いで「10年以上20年未満」が約2割と続く。これを、4年前の全市調査と比較すると、浦安全体での居住年数の最頻値は「10年以上20年未満」で全体の約3割。次いで「20年以上30年未満」約3割となる。このことから、サークル活動者は、市民の中でも比較的長く住んでいる人が多いということがわかる。

活動者がサークル活動に使えるという金額を訊くと、最頻値は「5000円ほど」で、全体の約半数であった。次いで「1万円ほど」が、全体の約4分の1だった。また、2万円以上使えるという人は、合わせて8.1%だった。しかし一方、サークル活動にお金は「ほとんどつかえない」という人は全体の6.4%となった。

活動者がサークルに入会するきっかけになったものを訊いてみると、比率が高かったのは「会員から誘われて」で約半数の47.8%だった。次いで「公民館広報や市のお知らせをみて」²が24.3%となる。両者を併せると、全体の7割を超える。ほかのきっかけには、「公民館の掲示やチラシなどを見て」、「サークルの講師のツテで」、「公民館文化祭などで会の活動を知って」などがある。「会員からの誘い」と「講師のツテ」など個人的な人間関係を通じて入会する比率は全体の半数を超えていることがわかる。

活動者の、サークル活動についての基本的考え方について、本調査では二者択一の2つの設問をした。第1は「サークル活動をするとき大切に思うことは、次のどちらか」というもので、結果は「成果が上がり、上達することだ」が13.5%、「楽しみながら行うことだ」が86.5%だった。上達志向の人より楽しみ志向の人が多くを占め、8人中約7人が「楽しみながら行うことだ」の方を選んだ。第2は「サークル活動の成果について、次のどちらか」というもので、結果は「地域で何かの役に立つようなら、それを生かしたい」が17.7%、「自分自身の生きる楽しみとして、

表1 サークル活動をするとき大切に思うことは、どちらかといえば

	実数	百分率
成果が上がり、上達することだ	40	13.5
楽しみながら行うことだ	257	86.5
合計	297	100.0

表2 サークル活動の成果は、どちらかといえば

	実数	百分率
地域で何かの役に立つようなら、それを生かしたい	51	17.6
自分自身の生きる楽しみとして、それを伸ばしたい	238	82.3
合計	289	100.0

それを伸ばしたい」が82.3%だった。地域志向の人より楽しみ志向の人が多くを占め、6人中約5人が「自分自身の生きる楽しみとして、それを伸ばしたい」の方を選んだ。全体として、サークル活動者は、彼らの活動を基本的に楽しみの活動としてとらえているということがわかる（表1、表2）。

3 サークル活動の実態

回答者が所属しているサークルの活動領域を、回答比率が高いものから挙げてみると、美術、ダンス、語学、音楽、幼児教育、体操、手芸、料理、茶・華道、文芸などとなる。

多くのサークルは、定期的な活動日を定めている。実際には会場に空きがなく希望の回数を活動に回せないサークルもある。サークル活動の頻度を月ベースで訊いた。「月4回以上」が47.1%、「月3回ほど」が25.2%。両者を合わせると全体の7割を超える。次いで「月2回ほど」が19.6%で、全体の約2割。さらに「月1回ほど」7.5%、「月1回未満」0.7%となる。

以上の設問との関連で、活動者に希望する公民館利用の頻度を訊いた。それによると、「月4回以上希望」が57.8%、「月3回程度希望」が22.3%となり、両者を合わせると全体の約8割となる。活動者が希望する活動日数が、現状では必ずしも満たされていないことがわかる（表3）。

通常のサークル活動の会場について聴いた。「1か所の公民館で」が59.7%で、全体の約6割を占める。「1か所が中心だが、別の公民館でも」が33.9%で、全体の約3分の1となる。

表3 サークル活動の頻度及び希望頻度

	実数	百分率	希望頻度百分率（参考）
月4回以上	144	47.1	57.8
月3回ほど	77	25.2	22.3
月2回ほど	60	19.6	14.6
月1回ほど	23	7.5	5.0
月1回未満	2	0.7	0.3
合計	306	100.0	100.0

表4 サークル活動の場所

	実数	百分率
1ヶ所の公民館で	178	59.7
別の公民館でも	101	33.9
その他	19	6.4
合計	298	100.0

表5 サークル会員数

	実数	百分率
10人未満	67	22.0
10人以上20人未満	136	44.7
20人以上30人未満	62	20.4
30人以上	39	12.8
合計	304	100.0

また、「その他」は6.4%だが、その実際は、市内の公的施設や民間施設を使用しており、有料施設が含まれている³⁾。全体の傾向として、多くのサークルは1か所の公民館で活動を続けたいと思っているが、会場の確保が難しいことから、他の会場を充てていると推測される。利用できる複数の公民館を効率よく使っていくという施設利用の効率性を重視すれば、複数の公民館を活動の場とすることは必ずしも悪いことではない。しかし活動者の立場からすれば、それは程度の差はあれ不本意な会場使用とみることもでき、その比率は全体の約4割に及ぶ(表4)。

サークルの会員の規模について。1サークルの会員数をみると「10人未満」22.0%、「10人以上20人未満」44.7%、「20人以上30人未満」20.4%、「30人以上」12.8%となる。最頻値は「10人以上20人未満」である(表5)。

4 サークル活動の運営

活動者が所属するサークルの現状をどのように受け止めているのか、主な指標について訊いた。まず、会員の人数について。現在の会員数が活動に適した規模かどうか訊いたところ、「適当な人数だ」とする人は87.8%だった。次いで「少なすぎる」8.9%、「多すぎる」3.3%となる。全体の約1割の人が、会員数が適正規模でないと思っており、その中では会員数は少ないことが問題だとする人が比較的多い(表6)。

会員の年齢構成について。「年齢に幅があり、運営上、問題を感じない」とする人は、全体の61.6%、「高齢化しているが、運営上、問題を感じない」は33.9%、「高齢化して、運営上、問題を感じる」は4.5%だった。会員の年齢のバランスがよく、運営もおおむね順調と考えている人は、全体の約6割である。一方、サークル会員の高齢化が進んでいると思っている人は全体の約4割だが、それが必ずしも運営上の問題にはつながらないと感じている人が比較的多い(表7)。

サークル活動の場所の確保について。「希望どおり確保している」とする人は、全体の50.5%、「おおむね希望どおり確保している」という人は45.5%。この両者を合わせると、全体の96.0%になる。「希望したようには確保できていない」という人は全体の4.0%だった。(表8)

表6 活動に適した会員の規模

	実数	百分率
適当な人数だ	267	87.8
多すぎる	10	3.3
少なすぎる	27	8.9
合計	304	100.0

表7 会員の年齢構成

	実数	百分率
年齢に幅があり、問題を感じない	180	61.6
高齢化しているが、問題を感じない	99	33.9
高齢化して、問題を感じる	13	4.5
合計	292	100.0

表8 活動場所の確保

	実数	百分率
希望どおり確保	153	50.5
おおむね希望どおり確保	138	45.5
希望のように確保できていない	12	4.0
合計	303	100.0

役員の任期について。役員が「適当な年数で交代している」と思う人は全体の95.1%だった。「役員の年数は長いように感じる」という人は2.4%。逆に「役員の年数は短いように感じる」という人は2.4%だった。なお、「役員の年数は短く感じる」という人が所属するサークルの中には、役員交代を年度ごとの輪番制としているサークルが含まれるものと推測される(表9)。

サークル会費について。「適当な額だと思う」という人は全体の85.5%。「高いと思う」人は1.6%、逆に「安いと思う」人は12.8%だった。会費の支出については、多くの活動者にとって支障はでていないことがわかる(表10)。

表9 役員の任期

	実数	百分率
適当な年数で交代	273	95.1
年数が長いように感じる	7	2.4
年数が短いように感じる	7	2.4
合計	287	100.0

表10 会費の額

	実数	百分率
適当な額だと思う	260	85.5
高い	5	1.6
安い	39	12.8
合計	304	100.0

指導者（講師やコーチ）への謝礼について。指導者への謝礼は、ほとんどの場合、活動者からの会費から支払われる。その金額が「適当な額だと思う」という人は全体の80.2%、「高いと思う」人は4.0%、逆に「安いと思う」人は15.8%だった。約6人に1人は、指導者への謝礼は安いと思っているが、これは、講師による指導が、ボランティア的な側面をもって行われている実態を反映したものと思われる。この結果を見る限り、昨今、全般的傾向として指摘されている公民館サークルにおける講師による私塾化の傾向は、活動者の支払い意識の面からはとくに確認されなかった（表11）。

次に、サークル活動者が活動を進める上での阻害要因と、活動を通じての効果・満足について訊いた。

まず、活動者に「サークル活動をしにくくしている要素」について訊いた（2つまでの複数回答）。結果は、「活動をしにくくしている要素はとくにない」が全体の約6割で、58.5%だった。活動上の阻害要因がある活動者について回答比率が高かったのは、次の2つである。「施設使用の申し込みが面倒だ」が全体の14.4%⁴⁾、「仕事や家事が忙しくて時間に余裕がない」が全体の11.3%。このほかの要因は、以下の通りである。「身近なところに施設や場所がない」3.9%、「費用がかかる」3.2%、「子どもや親の世話をしてくれる人がいない」2.8%など。施設の要因、活動者自身の生活上の要因、費用の要因などが示された（表12）。

活動者が活動を通じて得られる満足や効果について訊いた（3つまでの複数回答）。回答比率が高かったものから挙げると次のようになる。もっとも高い比率となったのは「仲間と楽しく過ごせた」で61.0%。次いで「他の人と親睦を深めたり、新しい友人を得ることができた」44.6%、「見聞が広がり知識が豊かになった」38.4%、「自由時間を有意義に過ごせた」35.1%、「健康・

表11 指導者への謝礼の額

	実数	百分率
適当な額だと思う	223	80.2
高い	11	4.0
安い	44	15.8
合計	278	100.0

表12 サークル活動の阻害要因

	実数	百分率
仕事や家事が忙しくて時間に余裕がない	32	11.3
子どもや親の世話をしてくれる人がいない	8	2.8
家族の理解が得られない	4	1.4
いっしょに学習する仲間がいない	4	1.4
費用がかかる	9	3.2
身近なところに施設や場所がない	11	3.9
施設使用の申し込みが面倒だ	41	14.4
その他	9	3.2
活動をしにくくしている要素はない	166	58.5
合計	284	100.0

表13 サークル活動による満足

	実数	百分率
見聞が広がり豊かになった	117	38.4
就職・転職などで役立つ知識や技術が得られた	3	1.0
生きがいが見つかった	65	21.4
自由時間を有意義に過ごせた	107	35.1
仲間と楽しく過ごせた	186	61.0
人と親睦を深めたり友人を得ることができた	136	44.6
健康・体力づくりに役立った	66	21.6
老後の心のハリができた	28	9.2
ストレスが解消できた	54	17.8
子育てから解放され、自分の時間が持てた	11	3.6
社会に役立つことができた	9	3.0
その他	4	1.3
とくに満足していることはない	2	0.7

体力づくりに役立った」21.6%、「生きがいが見つかった」21.4%、「ストレスが解消できた」17.8%、「老後の心のハリができた」9.2%などとなる。なお、「社会に役立つことができた」は全体の3.0%にとどまった(表13)。

5 サークル指導者への要望

サークルの活動者にとって、指導者は、活動仲間とは異なった特別の存在である。活動者は、指導を受ける指導者(講師・コーチ)にどのような役割を見出しているのだろうか。設問は「あなたにとって、指導者はどのような人ですか」である(複数回答)。活動者は、指導者のあるべき姿を念頭において回答したものと思われる。回答比率がもっとも高かったのは「新しい知識や技術を提供してくれる人」で、74.3%。全体の約4分の3にあたる。次いで「人間的な魅力があり、心のよりどころとなっている人」34.0%、「サークルの運営に、適切な助言をしてくれる人」30.0%、「得た知識や技術を地域で生かすことを勧めてくれる人」16.1%、「個人的な生活相談にも乗ってくれ、頼りがいがある人」7.3%となる。なお、「指導者にとくに意味を感じない」という人は全体の3.3%だった(表14)。

次に、指導者(講師・コーチ)を置いているサークルについて、サークル活動者が指導者との間に抱える問題点を尋ねた。設問は「指導者との関係で、悩んでいる点がありますか」である(複数回答)。結果は「指導者でとくに悩んでいる点はない」が75.8%で、指導者との間で基本的に問題は存在しない。活動者が具体的に悩んでいる内容について、その比率が高いものから挙げると次のようになる。「会員にもっと公平に指導してほしい」5.6%、「もっとほめるなど、会員のやる気を引き出してほしい」4.5%、「指導の弾みででる、人の心を傷つける言動を抑えてほしい」3.0%、「会の運営にあまり口出ししないしてほしい」2.6%、「謝金以外の盆暮れの付け届けをなしにしてほしい」2.2%、「謝金をもっと安くしてほしい」1.5%、「会誌、チケット、道具、材料など、購入の斡旋をゆるめてほしい」0.4%。「その他」に寄せられた悩みでは、指導内容のマ

表14 サークルの指導者像（複数回答）

	実数	百分率
新しい知識や技術を提供してくれる人	223	74.3
サークル運営に、適切な助言をしてくれる人	90	30.0
人間的な魅力があり、心のよりどころとなっている人	102	34.0
個人的な生活相談にも乗ってくれ、頼りがいがある人	22	7.3
得た知識や技術を地域で生かすことを勧めてくれる人	48	16.1
その他	2	0.7
指導者にとくに意味を感じない	10	3.3

表15 指導者との関係の悩み（複数回答）

	実数	百分率
公平に指導してほしい	15	5.6
会員のやる気を引き出してほしい	12	4.5
謝金を安くしてほしい	4	1.5
盆暮れの付け届けをなしにしたい	6	2.2
会誌などの購入斡旋をゆるめてほしい	1	0.4
会の運営にあまり口出ししないでほしい	7	2.6
人の心を傷つける言動を抑えてほしい	8	3.0
その他の悩み	7	2.6
とくに悩んでいる点はない	204	75.8

ンネリ化を指摘するものが複数あった（表15）。

6 施設及び行政への要望

公民館を利用するサークルの参加者に、公民館のあり方について2つの点で考えを訊いた。1つは、浦安市内にある複数の公民館の施設・設備のあり方についてである。二者択一で訊いたところ「市内の公民館ごとに施設・設備に特徴をもたせてほしい」という考えを支持する人は全体の40.6%だった。一方、「市内の公民館を同様の施設・設備にして、差をつけないでほしい」という考えを支持する人は全体の59.4%だった。市内の公民館が同様の仕様で使えるほうが良いという考えが高い比率となっている（表16）。

他の1つは、公民館を定期的に使用するサークルと一時的に使用するサークルについての、公民館の処遇についてである。二者択一で訊いたところ「定期的に活動するサークルには、ある程

表16 公民館の施設・設備についての意識

	実数	百分率
公民館ごとに特徴を持たせてほしい	116	40.6
公民館で差をつけないでほしい	170	59.4
合計	286	100.0

表17 公民館の利用についての意識

	実数	百分率
定期サークルに活動を保障すべき	216	74.2
全てのサークルを平等に扱うべき	75	25.8
合計	291	100.0

表18 サークル活動についての市への要望（2つまでの複数回答）

	実数	百分率
公民館を増やしてほしい	44	16.2
公民館以外でサークル活動をしやすい施設をつくってほしい	94	34.7
施設利用の予約方法を改善してほしい	77	28.5
公民館サークルの活動を積極的に広報してほしい	62	23.0
サークル活動の成果発表の場をもっと作ってほしい	22	8.1
利用に問題があるサークルに規制をかけてほしい	14	5.2
公民館の施設職員の対応を改善してほしい	30	11.1
その他	19	7.0

度の活動機会を保障すべきである」という考えを支持する人は、全体の74.2%だった。一方、「定期サークルも、ときどき利用するサークルも、平等に扱うべきである」という考えを支持する人は全体の25.8%だった。活動者全体の約4分の3の人が、定期利用サークルへの優遇的機会の保障を望んでいることがわかる（表17）。

サークル活動について、活動者が行政（浦安市）に要望することについて訊いた（2つまでの複数回答）。もっとも高い比率となった要望は「市内に公民館以外でサークル活動をしやすい施設をつくってほしい」34.7%で、全体の約3分の1の人が要望している。次いで「施設利用の予約方法を改善してほしい」28.5%、「公民館サークル活動を積極的に広報してほしい」23.0%、「市内に公民館を増やしてほしい」16.2%、「公民館の施設職員の対応を改善してほしい」11.1%、「サークル活動の成果を発表できる機会をもっとつくってほしい」8.1%、「公民館利用のサークルとしてふさわしくないサークルに規制をかけてほしい」5.2%などとなる。このほか、駐車場の拡張や保育室の整備などの要望が挙がった（表18）。

最後に、公民館に早急に作ってほしい設備を具体的に挙げてもらったところ、次のような内容となった。1年を通して快適な空調、各室にホワイトボードを常設、喫茶室、小ホール。また、ダンスなど身体表現系のサークルからは、大きく広い鏡、ストレッチ用のバー、足に優しい床、照明設備。音楽系では、防音設備付き音楽室、楽譜保管用の鍵付き書庫。駐車場の拡張や保育室の整備も挙がっている。公民館をより快適に、より有効に使えるような要望のほか、それぞれの活動の特質にあった設備についての要望が目立った。

7 公民館サークル運営の課題

かつて公民館の利用法としては、館が主催する各種講座に参加することが主流であったが、現在は、市民が自主的に運営に当る公民館サークルの活動が、公民館利用のもう一つの方法として

すっかり定着したようである。その活動内容は、美術、ダンス、語学、音楽など多岐にわたっている。本調査の結果は、公民館サークルの普及を改めて確認する結果になったが、一方で、問題点、あるいは問題の兆しもかなり明瞭にみえるようにもなった。

以下では、現在のサークル活動がかかえる問題点について整理し、対処すべき課題を明らかにしておきたい。

①地域活動とのつながりの模索

楽しみながらの活動、活動を通じての人生の充実というサークル活動の特質は、活動者にとって魅力的であり、活動仲間との親睦など社会生活上の意義も大きい。しかし、それらの活動は、地域社会をつなぐ手段として必ずしも効果を発揮していないと思われる。活動者の意識、サークル運営の方針、及び指導者（講師・コーチ）の指導方針の中で地域参画の意図をより明確にすることで、公民館サークルは幅広い市民層から支持されることになるものと思われる。

②定期的な活動場所の確保

定期的なサークル活動の要望に公民館の施設・設備が追いつかない状況がある。基本的な対応としては、市内の各公民館の施設を空かせないよう効率よく利用できるように公民館とサークル活動者が協力しあうことが重要である。また、行政の努力によって、他の公的施設（学校施設を含む）を公民館とできるだけ利用条件をそろえる形で活用できるようにすることも重要である。

③サークル運営の改善

会員の数を適正な規模とするため、広報による活動紹介を進めるとか、会費や講師謝礼の額を適正に保ち、サークル活動の質を確保するなど、サークルの運営に課題意識をもって臨むことが重要である。また、働き盛りの中年（とくに男性）のサークル活動への参加が比較的低調であることを考えると、活動の曜日や活動時間帯にもさらに配慮が必要となると思われる。公民館サークルが広い年代層の人々に参加を呼びかけられるような活動方針の設定が望まれる。

④指導者の指導力の向上

指導者は、公民館で高額の謝礼を受けるなど、営利活動とみなされる行為をすることは、社会教育法での営利事業の禁止条項によって禁止されている。指導者は、サークル活動者からは、知識や技能の面だけでなく、人格的な面からも指導者として期待され、敬意をもって遇されている。指導者はこうした期待に応えて、いっそう、指導者としての力量を維持し、高めてほしい。実際には、サークルに対する配慮を欠いた対応や心無い一言の助言で活動者が困惑する事態も生じている。

今後の公民館活動では、その主流が講座等の公民館主催事業から、市民主体のサークル活動に移行することが十分考えられるし、また、そのことは生涯学習の推進という社会教育の大きな目標からすれば妥当な移行とも思える。公民館サークルが市民の活動の中核的制度となるためには、サークルがおかれた活動環境をしっかりと把握し、改善のための課題を明確にしておかなければならない。本調査は、その手始めと位置づけられる。

注

- 1) 『生涯学習に関わる市民意識調査報告書』浦安市、集計・分析及び報告書執筆を野島が担当。2001年3月発行。今回の調査とこの調査では実施に4年の開きがあるが、設問が一致するものについては、本文で、浦安市民全体の学習活動に関する意識と公民館サークル活動者の意識を比較する資料とする。
- 2) 公民館活動に関する広報は、生涯学習全般に関するものとして生涯学習ニュース『ゆうスタディ』

(季刊)、公民館活動に関しては公民館情報誌『ルネサンス』(季刊) などがある。チラシ類には、「学びの広場・公民館」、各公民館には「公民館利用案内」、「サークル一覧表」、及び各サークル発行の活動紹介や入会案内のちらしが置かれている。

- 3) 浦安市の公民館は、施設使用は原則有料となっているが、多くのサークルは、市が定める「社会教育関係団体」の認定を受け、社会教育の振興の主旨から使用料減免を受けている。認定要件の1つに、10人以上の団体ということがある。公民館使用料の規定を例示すれば、昼間1時間当りの使用料は、会議室(45.54 m²) 100円、工芸工作室(56.42 m²) 150円、和室(51.30 m²) 210円などとなっている(午後5時以降の使用はこの約2倍の金額、中央公民館)。
- 4) 浦安公民館では、インターネット等による公民館予約管理システムをとっており、社会教育関係団体の認定を受け使用料減免を受けているサークルはインターネットや市が設置する市民情報端末から利用申請ができるが、公民館使用料を支払うサークルは、前もって口座振替手続きが必要となる。